

フオイエルバッハの会通信 第99号

紙上インタビュー11：服部健二氏

四人のカールとフオイエルバッハ。レーヴィットから京都学派とその「左派」の人間学へ。
交渉の人間観の系譜

編集部〔柴田隆行〕：昨年9月と本年2月の2期に、おもに分量の問題で分けて、服部さんが長年研究を続けてこられたフオイエルバッハ研究および京都学派の人間学の研究を集大成したと言えるご著書をこぶし書房から公刊され、一時期目を悪くされたというお話も耳にしていましたのでなおさらのこと、私たちとしましても喜ばしいかぎりです。この「紙上インタビュー」は、フオイエルバッハに直接ないし間接に言及し、フオイエルバッハ研究に参考になりそうなお著書を公刊された会員に対して、折々、続けていますが、最近対象者がいらっしゃらないのでしばし中断していました。再開できてなによりです。このインタビューは、まだ本書を読んでいない方に向けて読書を誘うことを目的としておりますので、当方の質問に対する回答として、「そのことについては本書の何ページで論じているので、そこを参照して欲しい」というような回答であってもいっこうに差し支えありません。私の誤解ももちろんありえますので。

さて本題に入りますが、服部さんは、フオイエルバッハないし京都学派に関するご著書として、1990年に新泉社から『歴史における自然の論理 フオイエルバッハ・マルクス・梯明秀を中心に』を、2000年にこぶし書房から『西田哲学と左派の人たち』をすでに公刊されています。したがって、今回の二分冊となったご著書の題名が『四人のカールとフオイエルバッハ レーヴィットから京都学派とその「左派」の人間学へ』とあってもすぐに納得が行きます。1990年のご著書もこのたびの新著も、フオイエルバッハ哲学だけでなく、服部さんが直接指導を受けられた梯明秀先生と船山信一先生の研究、さらにはその背後にある三木清、高山岩男、さらに遡って西田幾多郎らの哲学への本格的な研究が含まれており、それが服部さんの研究スタイルの一つの特徴になっていると思われまます。

1990年の著書のあとがきで、執筆動機ないし問題意識が列挙されていますが、それによると、一つは、人間を「自然の自己意識的存在」として自然の側からとらえかえすフオイエルバッハ的な見方の評価、二つめは、船山信一氏と梯明秀氏によるフオイエルバッハ研究への批判的取り組みの検討、三つめは「私事にわたるので恐縮だが、私を哲学的思考に誘った原体験というべきものが、自然のなかでの人間の存在理由を問うべき性格のものであった」とあります。いまとくに目を引くのが三番目の問題です。これについてさらに、「第三の問題は、もちろん非学問的な個人的な問題意識であるが、私の生をどこか根本のところ規定し、衝き動かし揺れ動かしているもの」と補足されています（305頁）。

「私事」とか「非学問的な個人的な問題」とかと書かれています。このたび公刊された新著を読むと、これこそがむしろ服部さんにとって最も重要な課題であり、フオイエルバッハ研究や梯、船山研究はこの問題を解決する手段にすぎないのではないかと私には思われます。この「私事」は、しかし、「ニーチェ的な根本的な批判がしみついてきた」ものであり、それはすなわち、考察それ自身が「窮迫に悩む有限な人間存在が、その窮迫を静めるために作りだしたアポロ的幻想にすぎない」のではないかという批判である（307頁）、と説明されています。このたびの新著の最初の巻にも、「自然は人間に対して根本的に無関心であるかもしれないから、主体的物質のイ

デーの客観的妥当性は括弧にくくっておく」(278頁)とあり、後の巻にも、「自然がかりに主体的であったとしても、この宇宙における人間存在に対して全く無関心であるかもしれない」(12頁)とあります。これらを見ると、私の予想もまったくの的外れではないと思われませんが、まずは、この点についてお話しただけると、服部さんの一連のご研究を貫く何かが見えてくるのではないかと期待されます。「私事」とか「非学問的」とかとあえて断っているのも、他人には語りえない事情があるのかもしれない、無理にとは申しません。

服部：私自身の問題意識のひとつは、フォイエルバッハに関心を持ち始めた大学生の頃から「自然の自己意識(的存在)」というロマン主義的自然哲学の反省概念にあります。それを抱いた私自身の「原体験」については、今秋発行予定の『アドルノ的唯物論との対話—石の上悟り切ったと石頭—(仮題)』のプロローグの二「落ちこぼれ冥途の旅の暇つぶし」に書いています。エッセイ風作品ですので、部分的に私自身の思想形成がわかるように、「私事」にかかわる「原体験」を紹介しています。この通信を借りてあらかじめ簡単にいいますと、次のようなことです。

高校一年生の夏休みの課題レポートとして偶然デカルトとパスカルを読むことになり、十分理解できないまま、後者の『パンセ』を取り上げ、全と無の間者としての有限な人間観について稚拙な文章を書いたのが、哲学的思考の始まりでした。それに続いて秋には天野貞祐の『学生に与ふる書』などを読み、真善美を学ぶべきだというカント主義的な理想主義的な呼びかけに共鳴し、受験教育にかかわる勉強に関心を失いました。今でいう登校拒否で、学校に行く格好をして、大阪の中之島にある府立図書館に通って好きな読書と、それに疲れたときは所属していたバスケットボールのクラブの練習にだけ参加していました。二年生になったときに友人から葉書がきて、長く出席していないことが母親に知られ、一騒動の末、正式に休学することになりました。不安でなかったといえは嘘になります。そんなある日、溪谷を遡行していたとき、滝に出会って高捲きした途中の崖から対岸を見下ろしたとき、対岸の岩壁の低いところに咲く花が目飛び込んできました。増水すれば水没するところにあるその花のイメージが今でもまだ鮮明に残っています。それがどういうことを語りかけていたのか、今でもまだ謎に満ちています。ただ、不安に揺れ動きながら、家族や学校や友人とのぎくしゃくした人間関係に悩んでいたなかで、そのイメージが死と生の問題として膨らんでいったのは確かです。

受験勉強をしないままキリスト教主義の小さな地方大学に入学し、そのあまりに原理主義的なキリスト教に反発し、実存主義やフォイエルバッハの思想を自分の拠り所にするようになりました。ニーチェが『悲劇の誕生』で、小舟に乗っていることで安心し荒ぶる海を直視しないという趣旨の弱さのニヒリズムを批判した箇所がありますが、私にとっての上記の花のイメージもそうした死生観に関連したものでした。しかし、キリスト教を内在的に批判する必要から、ニーチェではなくフォイエルバッハを卒論で取り上げることになりました。そこに「自然の自己意識」という人間観、自然観があることに気付いたからです。しかし実存主義やニヒリズムの思想の影響を強く受けていたこともあって、フォイエルバッハを梅本克己のように唯物論的実存の哲学として読み取ろうとしていました。そのため、自然の自己意識という主張に、無限宇宙における人間存在の有意味性を見出しながらも、他方では有限性が虚無性であるという主張や、フォイエルバッハが死の思想を展開していることなどに興味を覚えました。その結果当然のことのように、私は『死と不死についての諸思想』での自然史の思想を特に重視するようになりました。そこには、自分の外になにかが存在するという有限者としての人間の存在そのものが形而上学的な死であるという思想と、そうした有限者が自然史の全発展を通してそれぞれの生命度をもって生み出されたもの

であり、その限界においてその生命を終えるものは無限であるという新しい無限観があったからです。

編集部：1990年の著作では、書名からもわかるように、「歴史」という概念が重要な鍵を握るように思われます。新著では「歴史」という概念が表立っていないように見えます。もちろん、事項索引を見ますと「歴史」にもかなりの紙数が割かれているようですが、概念としての重要性、議論の中心としては1990年の著作ほどではないように見えます。それは私の誤解でしょうか。あるいは、何らかの意図ないしは論点の進展がおりなののでしょうか。

服部：私自身は上記のような自分自身の問題意識から関連する思想家をつまみ食いする形で思想史の研究を行っていますので、自然哲学とか歴史哲学とか特定の領域に限定した議論をすることはありません。今回の著作においても歴史については積極的に議論しておらず、歴史において振る舞い交渉する人間的現存在のありかたを人間学として描いただけにとどまっていますので、このご質問には答えようがありません。

しかし、『精神現象学』で啓蒙の自由と暴力の問題を見据え、『精神哲学』で主観的精神の内面的自由を客観的精神の領域で具体化しようとするとともに、国家の歴史的審判を取り上げ、自由の理念の実現過程として『歴史哲学』を展開していったヘーゲル、『物質の哲学的概念』以来、全自然史の思想を展開し続け、経済学的カテゴリーを人間自身の対象的カテゴリーとして読んで経済哲学を打ち出した梯明秀、ロマン主義的自然哲学の自然史とはまったく違う意味で自然史を論じ、憂鬱や空想という働きによって自然を歴史的なものに置き換える可能性を語ったフランクフルト学派のアドルノ、こういった人々の議論を取り上げるとき、私はいつも歴史における個々の有限な存在としての人間の存在のありかたを考えたいと思っています。

自然における死に関心があるのと同様、歴史における死にも関心があります。たとえば、ソ連が崩壊する過程で、ゴルバチョフが保守派のクーデターによって放逐される時、モスクワで民衆の抗議運動が展開されましたが、そのときバリケードを突破した戦車に轢かれたり兵士に発砲されたりして、ウラジミール・ウーツフ、ドミートリ・コマーリ、イーリア・クリチェフスキーという三人の若者が殺されました。クーデターがわずか三日天下で覆ったことからいうと、今ではだれも名前を知らない若者の歴史的行為の意味はなんだったのか、彼らの歴史的行為は世界歴史という法廷でどう審判され救済されるのか、こういった問題に関心があるのです。

また、拙著で取り上げた高山岩男が、社会と歴史を人間の「生む」「作る」「成る」という振る舞いによって展開したように、人間学を基礎にして歴史哲学を構想することはできると思います。梯が社会の起源や資本制生産の概念把握を全自然史の思想から展開したように、歴史としての自然史として歴史哲学を語ることも可能だと思います。ヘーゲルの歴史哲学を理念が動いて歴史的営みが審判されるというのではなく、歴史の動性において形成されるそのときどきの諸理念を重視して人間の歴史的生の営みを考えることもできると思います。今回の二つの書物ではこうしたいくつかの手がかりが置かれているだけにとどまっています。

以上のことを踏まえて結論的にいいますと、自然史としての歴史を、フォイエールバッハや梯明秀やアドルノやブロッホを射程に入れて考察することが私にとっての歴史哲学です。なおアドルノの自然史については、今秋出版予定の上記の著作で論じています。

編集部：新著で最も重要な鍵概念は、その後半部の副題に採用されている「交渉的人間」

だと思われます。「交渉」と言っても、本書を読めば一目瞭然ですが、いわゆる政治的な外交交渉や労使交渉等とは次元をまったく異にする概念です。これは、ご著書から引用すると、「人間的現存在が自然と他者と自己に対して振る舞い交渉する共同存在であること」であり、「人間的生が対自然、対他、対自のそれぞれの振る舞いの相互に媒介し合った構造的全体であること」だと説明されています（第一巻 303 頁）。第二巻では、これはフォイエルバッハの『キリスト教の本質』から引き出された考えだと説明されています（10 頁）。「キリスト教と近代科学との不幸な婚姻により、近代自然科学者が「自然に対する深い感覚」を欠いたこと、神学が人類から自然を「疎外」し、自然の「身になって感じる *hineinführen* [これは誤植。訳語ならびに原文 GW4:40 にある通り、正しくは *hineinfühlen*]」、自然の「身になって考える *hineindenken*」能力を奪ったと、近代における自然の疎外が摘出され批判されて」おり、こうした交渉的共同存在を浮彫にしたのがレーヴィットである、と。ただし、レーヴィットと異なり、服部さんはこれをおもに「自然の超越の問題として論究した」（第二巻 279 頁）と補足しています。そうすることで、梯明秀氏の全自然史の考えに通底するものも出てくるのでしょうか。

服部：「交渉 *Umgang*」という観念が、ハイデッガーとレーヴィットから田邊元や三木清を通して京都学派とその左派といわれる人たちに人間学の思想の核として入ってきたことは、拙著で述べた通りです。フォイエルバッハの場合、それに該当する観念は、「振る舞い *Verhalten*」であり、対象的存在という人間観です。これら二つの観念が近代的ないわゆる主客二元論の発想に立っていないということから、私はジェームズや西田の純粹経験論と同じ地平でフォイエルバッハを解説し、レーヴィットのフォイエルバッハ解釈を評価したわけです。

『キリスト教の本質』での人間観の核心は、理性と意志と心情という類的本質にあるのではなく、それらの類的本質を対象に対する振る舞い交渉という立場から展開したところにあると思います。理性と意志と心情という類的本質は、人間的現存在にとって有意味な対象に対する振る舞いにおいて、自分自身の存在を定立する働きとして解説することによって、伝統的心理学のように内的作用にとどめる必要はなくなります。自然に対する振る舞いの仕方、自己自身や他者に対する振る舞いの仕方、歴史的世界において文化を形成する仕方として理解されるからです。もちろん交渉とか振る舞いという用語は、宗教的对象に対する振る舞いとしてこの著で重要な役割を果たしていますが、レーヴィットのように人間的現存在に限定する必要はなく、フォイエルバッハが地球の太陽に対する振る舞いといったように、自然史によってそれぞれの生命度によって生み出された存在者の存在の仕方という存在論的概念として理解することができます。

交渉や振る舞いという観念は、解釈学的概念です。私は基本的にそれと同じ地平でフォイエルバッハを取り扱いました。ハイデッガーが現存在の交渉 *Umgang* と環境世界 *Umwelt* を一つのものとして理解したヒントは、生物学者ユクスキュルの発想にあったのですが、ちょうどそれと同じ関係がフォイエルバッハと有機化学者リーヴィッヒとの関係にあったと考えています。有機的生命の本質はその対象である無機的化学的物質に対する振る舞いと一つだという認識をフォイエルバッハは、自分自身の対象的存在という考えを実証するものとして受け取ったのだと思います。もっとも両者の関係について簡単に言及しただけでしたが。

編集部：最初の質問の繰り返しになるかもしれませんが、新著で、細かい議論は別として大枠として見た場合に私にとって最も強く印象に残ったのは次の一節です。それは、フォイエルバッハに見られる「自然や他者や自己に対してその『身になって感じ』『身

になって考える』ありかたを追求するものであった。人間的な罪業の印が刻まれ瓦礫と化した戦場の荒野で、破壊され見捨てられた自然や他者や自己に耳を傾けるかのように、一つ一つを救い上げ、人間的現存在の歴史的生の祭壇に捧げるのである。」(第二巻 279 頁) この人間の交渉的振る舞いを、服部さんはさらに、「マリアがイエスにしたように他者の『足元に座って、その話に身を入れて聞き入る』ありかた」での振る舞いと説明しています(同 280 頁)。これらの文字から滲み出てくる、「戦場の荒野」に対する激しい怒りと、それと対極にあるマリアのやさしさ(「人を憂う」優しさではなく「憂う人」としての優しさ)への共感に、服部さんのどのような原体験が込められているのでしょうか。

服部：私はフォイエルバッハの 1840 年代初頭までの著作を主に取り扱いましたので、かれの汎神論的な自然史の思想を強調しています。神＝愛＝自然という主張が展開された『死と不死についての諸思想』やエアランゲン諸講義を資料として重視したのもそのためですし、それがないと汎神論的思想を残している『キリスト教の本質』とその前後のテキスト理解が不十分に終わると考えています。汎神論の立場は、彼が独立した思想家として脚光を浴びるにつれて背景に退いていきますが、自然に対する汎神論的感情は対象に対する振る舞い交渉という対象的存在としての人間の現存在の立場で継承されていると考えています。自然宗教をめぐる議論や、「自然—人間」、「世界—人間」、「我一汝」といった諸議論は、対象に対する振る舞い交渉において開示される人間の現存在の共同構造として理解できるからです。

汎神論的感情として私が特に二つの著作で取り上げたのは、自然の身になって感じる *hineinfühlen* とか、感受 *Empfindung* という観念です。

感受の概念は多義的ですが、それを自然史の思想においてとらえるとき、そこにはいくつか重要な内容が含まれています。たとえば①愛による対象の美的直観としての美的感受、②自然との矛盾と一致、否定と肯定の感情、つまり情意の受苦と心情の喜び、③他の存在者との共苦と喜び、といった諸側面があると考えています。私が「自然の身になって *hinein-*」という自然に対する人間の現存在の振る舞い交渉の仕方に着目したのは、自然に対する理論的あるいは実践的振る舞いにおいて、上記の①と②、とりわけ②が、フォイエルバッハの近代科学批判にとって、またマルクスのフォイエルバッハテーゼへの反論にとって重要だったからです。もちろん「自然の身になって」ということの具体的内容はまだなにも規定されていません。言葉によって、論理によって、科学によって組みつくせない超越としての自然の領域があるということを消極的に示すだけの批判的用語にとどまっています。

もちろん、「自然の身になって」という振る舞いや、マリアがイエスの足元に座って「身を入れて聞く」という振る舞いは、人間的現存在が自然や他者との共同存在であるということを示すものだと思います。私自身が溪谷の岩壁に咲く花に魅入られた体験が、はたして拙著で示したようなフォイエルバッハ解読の内容と同じかどうかは不明ですが、少なくともその体験を自分なりに了解しようとして、自然の自己意識という観念をもった自然史の思想に近づき解読してきたことは確かです。

編集部：このたびは、つぎのご新著の準備でご多忙のなか、急で不躰な質問にも拘わらず、人間的現存在と交渉的振る舞いのことばの奥にあると思われる服部さんの生き方を、たとえその一部ではあるとしても垣間見ることのできるかたちで語って下さり、深く感銘致しました。私自身の人生と思索をあらためて振り返る良い機会となりました。改めて篤く御礼申し上げます。

通信100号記念原稿募集

「フョイエルバッハの会・通信」は、1989年5月31日に、当時事務局長をされていた寺田光雄氏が編集人となりその第1号を発行し、次号で第100号を迎えることになりました。

もう20年以上お会いしていない方や、入会以来一度もお会いしていない方々などなど大勢いらっしゃいますので、100号を記念して、会員のみなさまがいま何を考えていらっしゃるか、どうしていらっしゃるか、など、何でも構いませんので、ぜひ近況をお知らせ下さい。

字数は、60字ぐらいから600字ぐらいでお願いします。（もちろんこの企画とは別に論文やご論稿その他、投稿大歓迎です。それは枚数自由です。）

メールの場合は fbstein@cocoa.plala.or.jp、葉書等の場合は本会連絡先へ。

次号は9月に発行しますので、9月10日頃までにお送り下さいますよう、お願い致します。

書誌情報

川本隆「超越から内在へ——若きフョイエルバッハは神をどのように解説したか」
2016年4月、『哲学』第67号（日本哲学会）186-200頁

催し案内

ニュルンベルクのフョイエルバッハ協会主催「第212回フョイエルバッハ聖誕祭」
Treffen am Grab Ludwig Feuerbach zum 212. Geburtstag am Donnerstag, 28. Juli 2016 im
Johannisfriedhof Nürnberg

復刻シリーズ：暉峻凌三『哲学Ⅰ・Ⅱ』協同組合短期大学通信教育部教科書、1966年 フョイエルバッハ

他の先進諸国^{なま}では産業資本主義の体制のもつ矛盾や反人間性にたいする批判が、思想家たちによって生^{なま}のことで語られることが可能であったのに、ドイツでは遅れた封建絶対主義の体制をじかに批判することなど、おもいもよらないことであった。ドイツでの批判は観念的に、絶対主義の精神的支えであるキリスト教宗教についてのみおこなわれた。がんらい政治の批判であるべきはずのものが、宗教の批判ではじまったのである。フョイエルバッハの『キリスト教の本質』は、プロイセン反動政府の官許の哲学としてのヘーゲル哲学の観念論の体系が、じつはキリスト教信仰の論理的改作物にほかならないという見当をうけたうえで、そのキリスト教の観念形態を、ドイツではじめて哲学的に解剖して白日のもとに曝したのである。かれはここで宗教では超人間的・超地上的ということがいわれるけれども、「宗教の内容と対象は、徹頭徹尾人間的であること……神学の本質の秘密は人間の本質であること」を明らかにした。「ヘーゲルの絶対精神とは、抽象的な、自己自身から分離されたいわゆる有限な精神にほかならない。」「抽象するとは、自然の本質を自然の外部へ、人間の本質を人間の外部へ、思惟の本質を思惟作用の外部へ定立することである。ヘーゲル哲学は、その全体系をこれらの抽象作用にもとづけることによって、人間を自己自身から疎外した。」（「哲学の改革のための提言」1842年）このようなヘーゲル哲学を改革するには、自然を基礎として生きる現実的感性的な人間の見地に立たなければ

ならない。マルクスとエンゲルスはこの「現実的人間」の見地にふかい衝撃をうけ、やがてそこでの「感性」のかんがえかたの批判を通じてかれらのマルクス主義の立場の形成にみちびかれていった。フォイエルバッハの思想は、当時の政治権力の動向に合致せず、そのためかれは生涯ドイツの田舎の民間学者にとどまった。187-188 頁

ドイツは社会経済的發展においてイギリス、フランスからいちじるしくおくれた国であり、19 世紀にはいっても市民階級の下からの市民革命はとげられず、プロイセンを最大のものとして大小の絶対主義国家（領邦）が押しならんでいた。そして哲学の主流はいうまでもなくカントを創始とするドイツ観念論であり、それは先進民主国家での唯物論ないし経験論的思想から強い触発を受けつつ、それらを先験的（形式的）観念論という観点で、自国の観念論的伝統のなかへ編成しなおすことから発足し、ヘーゲルで絶対精神の哲学に到達した。この絶対的観念論を神学の合理的な粉飾形態とみなし、精神こそ自然の他在であると考えたフォイエルバッハの唯物論がヘーゲル派自身のなかから、ヘーゲル哲学の一つの帰結として現れたことの意義は大きかった。生のままの自然、そしてその自然を基礎として生きる現実的人間の見地での哲学をドイツははじめて、フォイエルバッハにおいてもつことになった。かれは哲学が「神学とのあいだにおこなわれた従来のおふつりあいな結婚」をきっぱりやめて、自然科学と結合すべきことを説いた。ところでフォイエルバッハがヘーゲルを批判した時代は、自然科学がドイツで劇的發展をとげた時代でもあった。即ち『動植物の構造および成長における一致に関する研究』（1839 年）を著したシュヴァンや『科学的植物学の概要』（1842-3 年）を著したシュライデンによって植物の細胞組織が確認されて生命力の仮説が打破され『農業と生理学とに應用された有機化学』（1840 年）でリービヒが動植物の生理の化学的説明をおしすすめ、『力の保存について』（1847 年）の著者ヘルムホルツと『物質代謝』（1845 年）を書いたマイヤーとによる「エネルギー保存の法則」の発見があった。これらは、実験的方法が力学をこえた生物学、生理学の領域においておさめた成果である。1834 年の関税同盟成立と翌年の鉄道開通とによって、ドイツの資本主義はようやく本格的發展期に入り、市民的自由と近代国家的統一への期待は高まった。フランスの二月革命がドイツにも波及して、三月革命がおき、労働者階級も革命の戦列に加わったが、まもなくプロイセン王権とブルジョアジーとの妥協がまたもや下からの変革を挫折させた。194-195 頁

事務局から

* 本紙は季刊発行です。次は 9 月発行予定です。ぜひ情報やお便りなどをお寄せ下さい。

* 年会費 500 円。郵便振替 00160-1-84468 「フォイエルバッハの会」。

* 本紙は、発行から約 2 週間後に下記ホームページにて pdf 版で公開します。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山 5 丁目 28-20

東洋大学社会学部柴田研究室気付

フォイエルバッハの会

tamast@toyo.jp

<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>